

むかし、むかしのことです。釈泉寺の村に、高さ五～六メートルの小さな滝がありました。その村に、後ぞえの母親が一人いました。夫がなくなったあと、くらしがとてもまずしくて、たいへんでした。七つか八つで、にくまれざかりの先妻の子どもと、かわいいわが子は、ことあるごとに、けんかばかりの日ぐらしをしていました。

ついにある日、思いあまって、まま子である先妻の子を、山へつれて行き、小さな滝の滝つぼめがけて、投げすててしまいました。

「おっ母、おっ母、助けてくれえ。」

と、なきさけぶ声をあとに、心をおににして、ふり切って家へ帰りました。

ところが、毎夜毎夜、ゆめの中に不動明王様がおこった眼をつり上げてあらわれ、

「おまえは、なんという人非人（註1）じゃ。義理のある子を、なぜすてたのか。」

と、宝剣をふりかざしながら、

「おまえの命をどうしてくれよう。」

と、問いつめられるので、まま母は生きたこちもないありさまでした。

（ああ、これは正夢だ。）

と、急いでまま子をつれもどしに出かけました。なきつかれてなみだもかわき、すっかりやせほそって、ぐったりしている先妻の子のすがたを見て、思わずかけよってだきしめました。子どもは、一目見るなり、

「おっ母、おっ母。」

と、なきすぎりました。

「ゆるしておくれ。ゆるしておくれ。わしほど悪い母親はいない。」

と、まま母は深く反省をしました。

不動明王様のおつげがなかったならば、三世に報いを受け（註2）なければならぬところであった、とおそれおののく心をひきしめて、不動明王様をおがみしました。



すると、きょうの不動明王様のお顔は、きのうまでと打って変わって、えみをたたえた、やさしいお顔に変わっていました。ないてわびをいう、まま母のざんげが、不動明王様に通じたのでしょう。

その後、子どもらの健やかな成長を楽しみに、母親はせつせと働いたかいがあり、まま子も、

「おっ母さん、おっ母さん。」

と、仕事を手伝い、親孝行をして、“孝子の家”と言われるまでになりました。

その滝は、だれが言うともなく、“まま子滝”とよばれるようになりました。

（註1）人非人＝人の道にはずれたことをする人。ひとでなし。

（註2）三世に報いを受ける＝子、孫、曾孫の三代にわたって、悪事のし返しを受けること。